

Chaldea After Story

黒乃ツバサ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、いくつもの特異点を巡って聖杯の回収を行った主人公とサーヴァントたちによる、甘い夢を見たつていい、こんな幸せがあったつていい、そんなありふれたカルデアでの日常を思い描いた物語。

内容は、その時の思いつきで――。 < () >

目次

頼れる後輩はマスターのために	1
ティアマト神との不思議な一日	8
現実と向き合い、前を向いて	16
プレゼントは五年分の愛!!	23

頼れる後輩はマスターのために

カルデアにある図書館にて彼女、マシユ・キリエライトは本の探索をしていた。

「えと、確かこの辺に……あ、ありました！」

人類最後のマスターである藤丸立香^{ふじまるりつか}とともにいくつもの特異点を巡って聖杯の回収を終え、休暇に入ったマシユは自身の読みたい本を探し続け、メモに書かれていた内の一冊を見つけ手に取った。

時間がある時には息抜きとして様々な英雄に関する本を読み続け、後の特異点での知識の提供を行ったりして役立てているのだが、今回に限っては違う本を選んでいった。

手にしたのは、『誰でもできる簡単な和食料理』と書かれた本だった。

「次にこれと……これと……」

炊事・洗濯などのコーナーにて一冊、また一冊とメモに書かれている初心者向けの料理本を手にし、テーブルへと運んでその場にて読み始めた。

マシユがこれらの本を読むようになったのは、自身の抱いた気持ちがきつかけだった。

冠位時間神^{グレイテイム}との決戦にてマシユは身を挺して立香を守って消えてしまったが、彼の声、温もり、そして……一緒にいたいという想いが繋がって時間神殿との切り離し寸前まで手を伸ばし続け、最後には無事に二人ともカルデアへと帰還、マシユは生還することが出来た。

この時でマシユは、冒険を通じて立香との過ごした日々を思い出し、自分が彼に恋をしたことに気づくようになった。

最初の事故がきっかけでデミ・サーヴァントとなり、人理修復のため、マスターの役に立つために戦場で戦うことを考えていた彼女は、好きになった藤丸立香^{ふじまるりつか}のために生活に必要な知識と女子力を学ぶようにして読み続けた。

冠位^{ゲー}時間^{テイ}神^アとの決戦から六日後の午後十二時過ぎ。

「ふあくあ……今日は久々に夜更かししたな」

久々の休みを過ごしていた俺はいつものように起こしに来たフォウ君によつて目を覚まし、部屋を出ては廊下にて出会うサーヴァントたちとの挨拶も交わし、ただのんびりと食堂に向かつて歩き続けた。

「よっ！ 随分眠そうだが大丈夫か？」

食堂の手前にて声を掛けてきたランサー、クー・フリーンに反応して俺は笑顔で答えた。

「うん、昨日気になってた本を読んで、それで夜更かししちゃったんだ」

「ふくん。あ、そうだ。食堂で今、良いもんが見られるからマスターもさっさと入った方がいいぞ」

「良いもの？」

「じゃな。嬢ちゃんのしつかり味わえよ」

そう言いながらクー・フリーンはその場を去り、彼の言ってる事が分からず俺は頭を傾げた。

その時で足元で叩いてくるフォウ君に気づき、俺は考えるのを後にして食堂へと入った。

「ん？ あれって……」

食堂に入った直後にて俺はある人物の姿を目にした。

キッチンにてお馴染みのエミヤにブーダイカの他、エプロン姿をしたマシユがいたのだった。

「あ、先輩！」

「珍しいね。マシユがキッチンに立ってるんだなんて」

「えと、たまにはいいかと思ひまして……きよ、今日は何がいいですか？」

「そうだな……久々に和食が食べたいから鮭の定食かな」

「鮭ですね。分かりました」

そう言つてマシユは業務用冷蔵庫へと向かい、いくつもの野菜と鮭

を取り出して料理をし始めた。

「なんかマシユが料理するの久々に見るなー」

「そりやそうだ。君のために作るのだからな」

そこへカルデアみんなのオカンであるエミヤが話し掛けてきて、料理をするマシユの様子を眺めながら話し続けた。

「自分が作った料理を君に食べてもらいたいと、私やブーディカに教えを乞うに来たのだ」

「俺のために？」

「彼女も一人の女性ということだ。つと、次のが来たようだ」

そう言つてエミヤは注文にきた人の下へと向かつていき、俺はマシユの手料理に期待しながら席へと着くようにした。

それから七分が経ち、料理を終えたマシユが完成した鮭の定食を運んできた。

「お待たせしました、先輩」

香り漂う焼き鮭の匂いに日本人の主食である炊き立ての米にみそ汁、キュウリの漬物といった定番の品を前に俺は合掌した。

「いただきまーす」

軽くみそ汁を飲んで体を温め、白米を片手に持ってマシユの焼いた鮭を頂いた。

「ど、どうですか？」

「もぐもぐ……うん、焼き加減が良くてとても美味しいよ」

俺の感想を聞いてマシユは笑顔になって喜んだ。

マシユの料理をする様子は今まで見た事が無いから新鮮な感じはあるけれど、彼女の作った料理はとても上手に出来てて美味しかった。

そうして白米とも合わせながら食べ、定食の品をすべて食べ終えて俺の腹は満腹した。

「ふう、ごちそうさま」

「はい、お粗末様です」

そう言つてマシユが空になった器を片付けようとした時で俺は氣付いた。

「マシユ、その手……」

「え、あ、これは……」

思わずマシユの両手を掴んでその状態を見た。

両手には、様々な場所に絆創膏が貼られており、それを見て俺は続けて言つた。

「俺のために、頑張つたんだな」

「えと、その……先輩には、人理修復のためにいろいろと頑張つてもらつたので、なにかご褒美があればと思ひまして」

視線を逸らし、頬を赤く染めながら懸命に答えるマシユを見て俺は笑顔で言つた。

「ありがとうマシユ。マシユのその想いは十分に伝わつたよ。今日のために料理を一生懸命頑張つて、俺は幸せ者だよ。これならマシユは良いお嫁さんになれるよ」

「お、およ……およ……」

壊れた機械仕掛けのような喋りをしてマシユの顔は一気に真っ赤になつて蒸氣が出た。

「きゆうく……」

「え!? マシユ!?」

そのまま後ろへと倒れそうになつた彼女をキャッチして俺は分からず仕舞いで慌てた。

「ありやりや、これは重傷だね」

「今のはお姉さんでもコロツといつちやうなく」

「ウー」

「え? え?」

「はあ……相も変わらず、とんだ女誑しです」

アレキササンダーにブーディカ、フランケンなど食堂にいた少人数はマシユの安否を確認し、アナ(メデューサ)だけは俺に軽くデイスッ

てきた。

食堂での出来事から場所を変え、俺は気を失ったマシユを部屋へと運び入れ、目が覚めるまで一時間ほど待ち続けた。

「んん……はっ！」

気絶していたマシユが勢いよくベッドから起き上がり、本を読んでいた俺は途中で終えて彼女に話し掛けた。

「大丈夫かマシユ、あまり無理をしちゃダメだよ」

「先輩……ここは」

「君の部屋だよ。あの後、気絶しちやっってたからここまで運んできたんだ」

「す、すみません！ ぐご迷惑をお掛けして……」

「気にしないで。むしろ感謝してるんだ」

「え？」

机に置かれてあった一冊のノートに手を取り、それを見ながら俺は再び話し掛けた。

「覗いちやっつてごめん。でも、料理に関してしっかり書かれていたのを見て俺は嬉しかったんだ。マシユが俺のためにここまで頑張っていたんだなって」

「先輩……」

「ブーディカから聞いたよ。俺も、マシユのことが好きだよ」

「……ッ！」

そう言った時、マシユの瞳から涙が流れ、俺は思わず驚いてしまった。

「ま、マシユ!! 俺、何か悪いことを……」

「い、いえ！ 違うんです！ その……嬉しいのです。先輩に、好きになってもらいたいと……思っていましたから……」

懸命に涙を拭う彼女を見て、俺は強く抱きしめた。

「せ、先輩……!!」

「俺も同じだよ。マシユと出逢ってから一緒に冒険をして、いつからかマシユと一緒にいたいって思うようになったんだ。最初の頃は自分も不甲斐なかったけど、俺はマシユを……一人の女性として好きだ。こんな俺で良かったら、これからもずっと……一緒にいてくれるか?」

俺なりのマシユへの告白を伝え、マシユは笑顔で俺を見て言った。
「……はいっ、もちろんです!」

その後、互いの唇が重なり合い、俺は驚きと嬉しきで頭の中が真っ白になった。

「その……初めての、キスなんですけど、いかがでした?」

「あ、うん……俺も、初めてなんだ」

「先輩……」

「ん?」

「これからも、よろしくお願いします」

「あ……うん、こちらこそ」

俺とマシユは互いに笑顔になり、もう一度、唇を交わした。

こうして俺とマシユの関係はパートナーだけでなく恋人となり、一緒に幸せを掴むことを誓ったのであった。

翌朝、俺とマシユはゆっくりと食堂へと向かっていた。

「おやおや、今日はとても素晴らしい光景に出くわしたわね」

いつものように陽気に話す人物、ダ・ヴィンチちゃんと遭遇して俺とマシユは挨拶した。

「おはよう、ダ・ヴィンチちゃん」

「おはようございます」

「はいはい、おはよう。二人とも仲良く……ん?」

挨拶を交わした直後、ダ・ヴィンチちゃんはマシユを見て何かを確

認し、マシユは只々頭を傾げていた。

「ふむふむ……なるほどな〜」

「えっと、ダ・ヴィンチさん？」

「仲良くするのは良いけど、夜はほどほどにね〜（ニヤニヤ）」

「ぶっ！」

「……ッ☒」

ダ・ヴィンチちゃんからの発言に俺は思わず吹いてしまい、マシユは真っ赤に染まって蒸発した。

「あら？ 冗談のつもりで言ったんだけど、マジだったようだね〜」

「だ、ダ・ヴィンチさんッ！」

「今日は何も任務が無いからいいんだけど、支障になることはしないでくれよ」

「ちよっ……！」

「それと、時に女の子は嫉妬深い生き物だから清姫とかには気をつけた方がいいよ。それじゃ〜ね〜」

言うだけ言つてその場を去ったダ・ヴィンチに俺はただ呆然と見送り、マシユのことが気になって視線を向けた。

「まさかすぐバレるなんてな……」

「あと恐ろしい人物の名が出てきましたけど……だ、大丈夫です！ シールダーとして先輩を守ってみせます！」

「あ、うん……ありがとう、マシユ」

可愛く、そして健気な彼女を見て俺は優しく頭を撫で、撫でられた本人はとても喜んでいた。

そして再び歩み始めた俺たちは食堂へと向かい、朝食を終えた後にカルデアでの仕事に戻るようにした。

ティアマト神との不思議な一日

人気の無い静かな廊下、そこを通りながらゆっくりと歩いていた。
「そろそろ日が昇る頃だな」

午前五時過ぎになんとなく目が覚め、特に予定が無かった俺は部屋を出てカルデアの中を回り続け、約一時間ほど散歩した。

その時、ある部屋の視線に入って歩みを止めた。

「ん？」

サーヴァントを召喚するために造られた『守護英霊召喚システム』。その装置がある部屋の扉が開いていて、何か影らしきものが見えたと思い、気になってその部屋の中へと入ってみた。

「誰かいますかー？」

聖杯の回収に欠かせないサーヴァントの召喚に必要な部屋はここ最近使っていないため電灯は真っ暗に消えていた。

廊下に点いてある光が部屋の中へと差し、そこで俺は驚きの人物を目撃した。

「なっ……!?」

「……」

そこには、ウルクにいた時で激闘を繰り広げて倒したはずの創成の神——ティアマトがいた。

ティアマトは俺の声に反応して視線を向け、俺はカルデアのスタッフたちを巻き込んでしまう危険性を考え、ジッとその場に留まるようにした。

「……」

ティアマトの姿は、ウルクで初めて見た時の——魔力反応が増大する前の状態となっており、今の所は静かに落ち着いている……と、見た感じではそう思っている。

すると、ティアマトが俺の方へとゆっくり近づき、観察するようにジッと見続けていた。

「……」

「ゴクッ……」

緊迫する状況に俺は唾を呑み込み、ティアマトとの視線を出来るだけ逸らさずに見つめ合った。

……その時だった。

『グウウウー……』

「へ……？」

突然のことでは思わず間抜けな声を出した。

ティアマトから空腹の音が響き、本人はお腹を優しく押さえた。

「……」

「お腹、すいてるの……？」

気になって質問し、ティアマトは何も言わずただ俺を見続けた。

驚きの人物との遭遇から緊迫していた空気はどこに行ったのやら、俺はいろいろと悩んだ末、ティアマトを連れて食堂へと向かった。

場所を変え、ティアマトを食堂へと連れて来た俺はエミヤにホットケーキを作ってもらおうように頼み、マシユとダヴィンチちゃん、ウルクで記憶を覚えているサーヴァントたちにも連絡をして食堂にて待つようにした。ホットケーキに関しては朝食で食べたいと思っただけ。

それから数分後、連絡を聞いたマシユとダ・ヴィンチちゃんがやって来て二人へと事情を説明した。

「なんとまあ……まさかウルクで激闘を繰り広げて倒した、かのティアマト神がそんな所にいたなんてね」

「先輩が無事で良かったです……ですが、危ないですよ先輩！先輩にもしものことがあったら……」

「ごめんマシユ、心配かけちゃって。でも、俺も本当にビックリしたよ。ティアマトがいつの間にかカルデアに来ていたし」

「スタッフに聞いた所、あの場所が使われた形跡がここ最近まったく無いんだって。一体いつ、どうやってここにやって来たんだか」

「それにしても……よく静かにしていますね。私たちがウルクにいた頃は、悲しく、そして恐ろしいほどの存在で倒すのに苦労しましたが……」

食堂のテーブル席に座り、周辺を見渡しているティアマトを見て俺とマシユはウルクでの出来事を振り返った。

ウルクにいた時は聖杯によって復活し、その影響もあって戦いに苦戦し続けたけど、今のティアマトは大人しくただ何かに興味を持つ子どものような感じに見えていた。

そう思っていた時、廊下から駆けてくる音が聞こえた。

「ティアマトが来てるって!？」

俺の連絡受けたイシユタルを始め、エレシユキガルにケツアル・コアトルが駆けつけ、ケツアルは俺の方へと一直線で来て思いつきり抱き付いた。

「藤丸君、大丈夫でした？ お怪我とかありませんでした？」

「うん大丈夫、襲われるようなことが無かったから」

心配してくれるケツアルに俺は笑顔で返答し、イシユタルとエレシユキガルはティアマトを見つけ、マシユたちとの会話に加わるようにして状況を確認した。

「よく無事でいられたわね。それにしてもカルデアに来ているのには驚きだわ」

「聞いた話では、今は空腹状態ですのでエミヤさんに急いで朝食を用意してもらっているそうです」

「カルデアの食事を食べさせるの？ そもそも食べるのかどうかも分からないのに……」

「そこは分からん。とりあえず最初に目撃した藤丸君に任せるしかないし」

「反対よ！ アイツにもしものことがあつたら……」

「やれやれ、恋した乙女たちは心配性だな」

「……ッ☒」

何かあったのかダ・ヴィンチちゃんと話をしていた三人が赤くなつて大人しくなり、そこへ調理を終えたエミヤが俺のを含め二人分の

ホットケーキを運んできた。

「まったく……準備をしていた所でとんでもない客が来るとはな。君にはとんでもない呪いでも掛けられてるのか？」

「それはなんとも……いきなり急ぎの注文して悪い、エミヤ」

「気にするな。マスターの役に立つことがサーヴァントの役目だ。とにかく向こうへ運ぶから後はなんとか頑張ってくれ」

「ねえ藤丸君、ホントに大丈夫なの？」

「うん、とりあえずみんなと様子を見て。何も無いことが一番だけど」

そう言つて俺はティアマトの所へと向かつて隣の席へと座り、エミヤ製のホットケーキが俺たちの前に置かれた。

「では、ゆつくりと食べてくれ」

料理を前に俺はいつものように合掌し、その様子をティアマトが見ていた。

「あ、これ？ 食事する前の儀式みたいな物かな。作ってくれた人と料理となつた食材への感謝をするための行いだから」

それを聞いてなのかティアマトも見よう見まねで（喋らないけども）合掌を行い、イシユタルたちもその様子を見てとても驚いていた。

その後、食いやすいサイズに切つて口の中へと頬張つたが、ティアマトは置かれているホットケーキをジッと見ていた。

「……」

ただ見てるだけで食べる様子は無く、俺はふとティアマトの前にあるホットケーキを食いやすいサイズに切つて食べるかどうか聞いてみた。

「えと……これを、食べる、口、開けてくれる？」

ジェスチャーするように言つて、それを理解したのか口を開いてくれた。

切つたホットケーキを口へと入れさせ、ティアマトはモグモグとしながら食べた。

それから気に入ったのか、俺の方へと向いて口を開け、それを同じように繰り返しながらホットケーキを食べさせた。

「むう……相手が相手だから手を出しにくいんだけど……」

「羨ましい……あんなこと私だつてしてもらいたい！」

「いやはや、これは中々見られない光景だね」

「これはお姉さんも嫉妬しちゃうな」

「確かに羨ましいです……つて皆さん、今はそう言ってる場合じゃないです！」

その後、朝食を終えた俺はティアマトと手を繋いでカルデアの中を案内した。

単独行動の回避と（黒髭氏みたいな）変な人たちに連れて行かれないうようにするため、なるべく手を繋いで行動をするようにとダ・ヴィンチちゃんが言ったけど……まあ、本人は真面目な半分面白さでそう言っただらうな。視線の痛さが感じるし。

図書館や訓練所、いろんな場所を巡ってはそこで出会ったサーヴァントとのちょっとした交流（マリーのお茶会やジャックたちとの遊び）も行い、（無表情だけど）ティアマトもいろんなことに興味を持って触れ合いを続けた。

恐ろしくも強敵であった彼女の本来は大人しく、本当は人類のことを愛していたのではないかと俺はそう思っていた。

いろんな予想もあるけど答えは誰にも分からない。

ただ……この機会でもしも、ティアマトが人類の可能性を、人類が生きるに値する存在であることを知ってもらえればあの時の悲劇を二度と起こすことは無いんじゃないか。

そう思いながら歩き続け、ティアマトが歩みを止めたことで俺も止まった。

「どうしたの？」

ティアマトの視線が向けた先は、いくつも浮かぶ雲と照らす太陽、そして青い空だった。

「……」

外の光景にティアマトは窓に手を当て、ただ静かに眺めていた。

マシユの話では、子どもである神々を産んで、育て、愛していたけれど、その神々は原父であるアプスーに反旗して世界の支配権を手に入れ、母親である彼女にさえ剣を向けたのだ。

愛していた神々に剣を向けられ、さらに自分の存在意義を人類に否定されたことで恨みや憎しみ、悲しみを負ったティアマトは世界を滅ぼそうとした。

歴史としては最悪な結末となってしまうけれど、本当はどこかで今も神々のことを、人類のことを信じていた気持ちがあつたんじやないかと俺は思った。

僅かに残る良心があつて、それが消えるまで信じていたのではないか。

分からないけど……でも、それでも俺はそうであつたと思いたい。今まで時代を駆けてその証を残してきたサーヴァントのように、彼女のことを……。

外の風景を見終えたティアマトが戻ってきたその時、俺は彼女の変化にすぐに気付いた。

彼女の頬に——涙が流れていたのだ。

「それ……」

「……」

気が付いていなかったティアマトは自身の涙を拭いたものの流れ出続けるため止まらず、俺はそんな彼女を見て静かに抱き寄せた。

「もう、大丈夫。ここにはアナタを否定する人たちはいない。いたとしても俺が、俺たちが守ってみせるから」

「……」

俺の言葉に反応したのか、彼女はそのまま俺の体に抱き付き、涙が治まるまでくっつき続けた。

様子を見ていたマシユたちの所から鼻水の音が聞こえたけど、俺はとにかくティアマトの気持ちが悪くまで抱き続けるようにした。

時が流れて時刻は夜の十時前。

夕食と風呂を終えた俺はティアマトに手を引つ張られ、『擬似地球環境モデル・カルデアス』の前まで連れて来られた。

「どうしてここに？」

カルデアスを前に俺は疑問を抱いたが、ティアマトは俺の方へと向いて再び抱き付いた。……その時だった。

「え？」

ティアマトの体から光の粒子のようなものが見え、彼女は俺から離れて静かに見つめてきた。

「……消えてしまうのか？」

俺は問い詰めるも彼女は答えることは無かった。

足元から徐々にティアマトの体が粒子と化し、何も出来ない俺はただ見ているしかなかった。……いや、出来ることが一つある。

「ティアマト……」

「……」

「また……いつかもう一度、会おう」

俺は消えゆくティアマトに近づいて手を握り、彼女と視線を交わすようにして約束の言葉を伝えた。

すると、奇跡が起きた。

「あり……が、とう……」

「ッ！」

無表情で一切喋ることがなかったティアマトが笑って……感謝の言葉を発した。

ありがとうと、そう伝えた彼女はそのまま消え、その場に俺だけが残った。

そこへマシユと、ティアマトに関わったサーヴァントたちがゆっくりと歩いてきて一人ずつ話し始めた。

「消えて、しまいましたね……」

「まったくアンタと関わるとロクなことが無いわね。でも、今回限りは悪くなかったわ」

「藤丸殿は我々の予想を超えた奇跡を起こしますね」

「それが藤丸殿の良い所であります！」

それぞれが俺への評価を言い、ウルクの英雄王・ギルガメツシュが俺の下へと近づいた。

「藤丸よ、善い働きをしたものだ。まさかあのような神さえも手懐けるとはな」

「手懐けて……俺はただ、彼女と普通に接しただけだよ」

「フツ……フハハハハハ！ 此度に限ってもつくづく面白い奴だな、お前は」

ギルガメツシュは上機嫌に笑いながらこの場を去って行き、俺はもう一度カルデアスを見ながらティアマトのことを思い浮かべた。

「また会おう、ティアマト」

こうして俺たちの一日は終わり、また新たな一日が始まるのであった。

現実と向き合い、前を向いて

七つの特異点を巡っての聖杯探索を果たし、ソロモン王との決戦で俺たちの冒険は終わった。

人理焼却によるグランドオーダー完遂から一年。ダ・ヴィンチちゃんとホームズを除く英^{サイヴァント}霊たちは役目を終えて座へと消え、苦楽を共にしたスタッフさんたちとの日々もあと少しとなった。

マシユはカルデアに残る事となり、俺は実家へと帰国となっていたが、事はそう簡単には行かなかった。

査問会と一緒にヘリで飛んできた、魔術協会から派遣された新所長、ゴルドルフ・ムジークがカルデアの全権を引き継いだ直後、俺やマシユ、カルデアスタッフ全員は拘束され、執拗な尋問を受け続けた。一年間の空白、俺たちにとって人理を守る戦いをしていても、余所にとつては絵空事に過ぎず、記録を見ても残っているのは、多くの死者とマスター候補という貴重な人材の負傷、カルデアの多くの禁則行為に触れたという認識だけだった。

意図的なものか、作為的なものかを計るために査問会が開かれ、十一日にて全員の無罪放免が発表され、新旧スタッフの入れ替え、コフィンに眠る、本来グランドオーダーを果たすはずだったAチームの解凍・治療が行われ、すべてが終わろうとしていた——その時だった。『警告。警告。現時刻での観測結果に□□発生。』

観測結果、過去に該当無し。統計による対応、予報、予測が困難です。

観測値に異常が検知されません。電磁波が一切検知されません。地球に飛来する宇宙線が検知されません。人工衛星からの映像、途絶しました。

マウナケア天文台からの通信、ロスト。

現在——地球上において観測できる他天体はありません。『冷凍冬眠されていたはずのAチーム、七人のマスターが消失しており、シバが停止、カルデアスに異常が起き始めていた。』

——ドドドドドドドドドドッ！

銃声が聞こえ、カルデア館内に謎の武装集団が襲撃してきた。

突然の敵にマシユは俺や同室でいたムニエルを守るべく、再び礼装を身に纏い戦いに投じたが、英霊の力を失っていたため身体能力が劣っている上に長時間維持する事が困難になっていた。

途中でホームズに救ってもらったけど、そこから事態はさらに悪化していき、警備兵が全員殺され、カルデアスタッフのほとんどが襲撃してきた集団のリーダーであるサーヴァントに氷漬けされ、カルデアは既に崩壊へと進んでいた。

逃げ遅れたゴールドフ所長の救出も行い、そのまま生き延びているスタッフも含め全員で脱出するはずだったが……

「来るな、藤丸立香！」

逃げる直前にてダ・ヴィンチちゃんが言峰神父によって心臓を貫かれてしまった。

助けようとしたが、俺たちに逃げる時間を稼ぐために零基グラフを託し、俺たちはホームズが秘密裏に準備していた虚数潜航艇シャドウ・ボーダーに乗って全滅を免れるように脱出した。

カルデアが陥落し、無事に逃れた後に死んだはずの小さなダ・ヴィンチちゃんの登場、自分がいた場所が南極だったこと、など頭が追いつかない出来事があったものの考える時間はなかった。

空から隕石のような落下物がそれぞれ七箇所に向けてまっすぐに落ちていき、途中から通信がカルデアに——自分たちに向けて送られてきた。

『……通達する。我々は、全人類に通達する。』

この惑星はこれより、古く新しい世界に生まれ変わる。』
通信から男性の声が聞こえ、彼からの声に俺たちは耳を向けた。

『人類の文明は正しくなかった。我々の成長は正解ではなかった。』

よって、私は決断した。

これまでの人類史——汎人類史に叛逆はんぎやくすること。』

それは、宣戦布告だった。

自分たち人類の文明と進化を否定した、宣戦布告だった。

『今一度、世界に人ならざる神秘を満たす。神々の時代を、この惑星ほしに

取り戻す。

そのために遠いソラから神は降臨した。七つの種子を以て、新たな指導者を選抜した。

指導者たちはこの惑星^{ほし}を作り変える。もつとも優れた『異聞の指導者』が世界を更新する。

その競争^{せん}に汎人類史の生命は参加できず、また、観戦の席はない。

空想の根は落ちた。創造の樹は地に満ちた。

これより、旧人類が行っていた全事業は凍結される。

君たちの罪科は、この処遇をもって清算するものとする。

没人類史は、二〇一七年を以て終了した。』

この瞬間、俺たちは襲ってきた謎の集団とそのサーヴァント、言峰神父とコヤンスカヤの率いる人たちの正体を知る事となった。

『私の名はヴォーダイム。キリシユタリア・ヴォータイム。』

七人のクリプターを代表して、君たちカルデアの生き残りに——いや。

今や旧人類、最後の数名になった君たちに通達する。

——この惑星^{ほし}の歴史は、我々が引き継^つごう。』

こうして俺たちの新たな戦いが始まった。

西暦二〇一八年。彼らクリプターによる七つの異聞帯により白紙化された世界。

前人未到の聖杯戦争に潰された現在を取り戻し、未来に打ち克つ戦いを終わらせるために、俺たちは戦うことを選んだ。

向かう先の世界を滅ぼすことになっても……。

四つ目の異聞帯の消滅を確認し、俺たちはノウム・カルデアへと帰還した。

「あ……」

長い休みを取っている中、俺は食堂にて静かに座るマシユを見つけ

た。

彼女の様子は今回も同様に、暗くとても落ち込んでいた。

「……」

インドの異聞帯が消滅する前、ビーチユに立ち寄ったマシユはアーシャに父親がいたことを伝えた。

忘れていた真実を、アーシャに少しでも理解してほしいために。

「ここでもなにやってるの後輩」

「うおっ!!」

背後からの声に俺はビックリして距離を取った。

そこに、三つ目の異聞帯で消滅し、サーヴァントとして召喚された虞美人先輩がいた。

「先輩……? それに虞美人さんも」

俺が声を出したことでマシユが気づき、虞美人先輩はマシユの様子に理解してゆつくりと近づいた。

「いろいろ聞いているが、いい加減理解したらどうよ」

「それは……分かってますが……」

「先輩、ちよつと……」

「アンタは黙ってな!」

厳しい一言に俺は黙り込んでしまい、先輩は続けるようにマシユへと話をした。

「よくもまあ、そんな気持ちを持って今までの異聞帯を滅ぼせたものよ。私や項羽様、数多のサーヴァントを倒したくせに」

「……」

「没人類史の未来を取り戻すためには、別の未来を滅ぼさなければならぬ。どう考えたって、異聞帯で生きる人間を救うなんてこと出来るわけないでしょ」

「そう……ですが……」

「所詮は過去の残骸。それを消さなければアンタたちは消える。迷っている暇はないし、残酷だろうがなんだろうがアンタたちに選択肢なんて一つしかないからな」

「そう、ですが……!」

「つて先輩キブギブー！ ああああああッ！」

「先輩?! 虞美人さんストップストップ！」

「嫌だね！（最初からこうすればよかったのよ。コイツを困らせるのなら）」

「こ、項羽との、温泉、手配しま、す！」

「なっ?!」

俺が発した一言で先輩のヘッドロックが終わった。

あー……マジでこれで死ぬところだった……。

「べ、紅閻魔ちゃんに、二人分を予約しておきますので……」

「そ、そんなので、私の気分が優れると思って……!」

「マスターの声が聞こえたが、何かあったのか？」

「こつ、こつこつこつこつ、項羽様?!」

食堂に入ってきた項羽の登場に虞美人先輩はビツクリして身形を整え直した。

「あ、項羽。実は……」

「次の異聞帯ロストベルトに向けて気合を入れてあげたのです！ さらに強大な敵が現れても挫けないようにと！」

「ふむ、此度の異聞帯は強力な神霊によって苦戦を強いられ続けたと聞いておる。次の異聞帯でもさらなる敵が現れるであろう。だが、たとえどれほど強大であってもマスターのために人理の未来を紡ぐことを私は誓った。故にマスターよ、汝のためなら私は礎になることを厭いとわない」

いきなりの重い発言！ 何回もこういうのは慣れないな……。

「いやそこまでは……」

「理解している、汝が私たちのことを思っているのは。だがいずれ、戦いの中で犠牲が必要になる時が来る。しかと、その時が来た場合のことを考えられる内に考えておいた方がいい」

その言葉を聞いて俺はふと、前のカルデアにいた頃で聞いた酒？童子の言葉を思い出した。

金時の昔の話を聞いていた中、彼女は俺にその話を参考にしてこう言った。

『アンタはんも、その時が来たらどないするんやろねえ。矜持と世界と仲間の命……どれか一つを選ばなアカン時が来はつたらどないします？』

この問いかけを聞いて俺は思わず黙り込んでしまった。その答えを言葉ではなく、態度で返さなければならぬものだど理解したけども、その頃の俺は迷い、悩み考え続けていた。

そして今回も、項羽の言葉に俺は悩み続けるだろう。でも、悩みがあるからこそ悩んで悩んで悩み続け、自分が納得する答えを決める。それが人間だと博士は……ロマンは言っていた。

「答えをすぐに出すのは出来ないけど、考えて、悩んで、自分が納得する答えを見つけてみるよ。消えていった、託してくれた人たちの想いを無駄にしないために」

「……承知した。では、私はこれにて失礼する」

俺の今言える答えを聞いて項羽はその場を去った。

納得したかどうかは分からないけれども、俺は俺で出来る限りのことを尽してみせようと思った。

辛くも残酷な出来事があっても、出来る限りの犠牲を避けるため、この戦いを終わらせるために。

人類を守る責任と、生き残るための責任を背負って、俺たちは生きることを諦めない――。

「後輩、ちゃんと項羽様との分を用意しろよ」

「あ、はい」

「先輩……」

「フォウ……（さつきまで良かったのに最後に締まらないな……）」

「あれ？ フォウくん何時からいたの？」

「フォウフォウ！（最初からいたし思いつきり忘れてただろ！）」

プレゼントは五年分の愛!?

毎年の冬に行い始めているカルデアでのクリスマス。

恒例のようにサーヴァントによる問題が起こり、その度に現れるサ
ンタサーヴァントとともに解決し続けた俺は五年目のクリスマスイ
ベントを終えて部屋へと戻っていた。

「今回も疲れたな……風呂入るとするか」

そう言いながら部屋の前まで戻ってきてドアを開けようとした時

『プスッ!』

「あ た っ っ!」

いきなり背後から何かに刺された痛みが襲い掛かり、俺は振りかえ
ようとしたが……

「な、なん、だ……」

襲い来る眠気によってだんだん気が遠のいていき、俺の意識はそこ
でブラックアウトした。

カルデアにある大広間の部屋にてマシユを初めとした数多くの女
性サーヴァントが集まり、大量に敷かれてある布団について話し合っ
ていた。

(※ここから分かりやすくサーヴァント名を入れていきます)

マシユ「ナイチンゲールさんに言われてこの部屋に来たのはいいで
すが……」

宮本武蔵(セイバー)「なんでこんなに布団が並んでいるの?」

鈴鹿御前「あ、もしかしてここで女子だけの二次会をするために布
団も用意しておいてくれたんじゃない?」

エリザベート(ランサー)「うーん……あのナイチンゲールがそんな
気遣いをする?」

フランシス「まあいいじゃん！　ここでアタイ等だけでもパーツと盛り上がるうじゃないの！」

荊軻「そうだそうだ〜！」

ブーデイカ「いやアンタたちは飲みたいだけでしょ〜！」

酒好きな組はドンと座って会場から持ってきた酒を酌み始め、呆れた者たちもその場に座って呼び出した張本人——ナイチンサンタが来るまで談話し始めた。

アタランテ（バーサーカー）「ジャックやナーサリーとかの子どもたちは早めに休んで、ダ・ヴィンチは他の用事でいい。あと何人かは部屋に戻ったな」

宮本武蔵（セイバー）「他で確認していなかったのは……清姫、頼光、メイヴ、キアラ、キルケー、ペンテシレイア……」

マシユ「ライネスさんと 그레이さん、式さんと藤乃さんもいませんね」

イシユタル（アーチャー）「というか 그레이と式、藤乃以外はほとんど相手したら苦労しちゃう組よね。主に清姫やキアラ、メイヴとか」
イシユタル（ライダー）「ペンテシレイアはまたアキレウス探しをしているし、面倒な相手がいなくて助かるわ〜」

スペース・イシユタル（零基2）「ていうか今更だけど同じ顔のサーヴァント多すぎでしょ！　ただでさえアルトリア側が多いのに！」

謎のヒロインX「やはり私以外のアルトリア顔のサーヴァントは排除した方がいい！　セイバー死すべし！」

メデューサ（ライダー）「縛られた状態で言っても格好がついていませんよ」

カラミティ「せっかくの楽しい日なんだからXも楽しもうよ〜」

広間の賑やかさが出てきた所で扉の開く音が聞こえ、一斉に扉の方へと視線を向けた。

ナイチンサンタ「皆さん、集まっていらっしやいますね？」

マシユ「あ、ナイチンゲールさ……」

視線を向け、ナイチンサンタを見た直後にて隣にある大きな箱に気付き、代表的にマシユが質問した。

マシユ「ナイチンゲールさん、それは？」

ナイチンサンタ「今から説明しますのでお待ちを」

箱を乗せた台車を押し、ステージへと向かったナイチンサンタはマイクを取り出して音声を確認し、マシユたちへと向いてその場で話し始めた。

ナイチンサンタ「お待ちせしました。これよりみなさんをここへお呼びした理由について説明します。その前に、こちらをご覧ください」

そう言つて背後からゆつくりとスクリーンが降りてきて、設置されているプロジェクターを起動させて映像を映した。そこには、何かしらのグラフや数字が多く書かれていてマシユたちはそれを見ながら何かと話し合っていた。

マシユ「このグラフと数字は一体……」

ナイチンサンタ「ここ最近、みなさんの身体検査を調べてみて一つだけ共通する問題がありました」

パールヴァティ「共通する問題？」

玉藻の前（キャスター）「それは一体何のですの？」

ナイチンサンタの発言にみんなはゴクリと唾を飲んで静かに見続け、ナイチンサンタの口が開くとともに彼女は答えた。

ナイチンサンタ「生理的欲求不満です」

『ブーーーーー！！』

予想だにしなかった発言に酒を飲んでた組も含め、ほとんどが思わず吹いてしまい、残る少数は顔を赤らめて固まってしまった。

ナイチンサンタ「私を含め、みなさんは藤丸立香との関係を持つている人たちで、彼との健全なやり取りをされていることには理解しています。勿論ここにいない何名もいますが、マスターへの欲求が知らない内で溜まっていて、それが五年続いてここにいるほとんどが既にじ……」

マシユ「それ以上言わないでください！」

涙目になってマシユが静止させ、理解した何人もナイチンサンタの発言に視線を下へ向けたまま涙を流していた。

エレシユキガル「確かに……確かに、藤丸は優しいし、私やみんなのこと、大切に思ってるの、分かってるのよ……」

イシユタル（アーチャー）「でも……好きになっちゃったんだからしょうがないでしょ！」

牛若丸「敵になつてしまった、私のことを気にせず許してくださいまし……」

望月千代女「真明を告げられなかった頃の拙者を、信じて待ってもらいました……」

静謐「毒の体を持つ私を、気にせず頭を撫でてくれました……」

スルーズ「創られた存在である私たちに、在る意味を教えてくださいました……」

涙ながら自身の思っている気持ちを告白していき、そこから徐々にエスカレートしてきた。

メルトリリス「大体、立香が悪いのよ！ 私だけでなく他の子にまで恋という感情と思い出をたくさん作らせたんだから！」

ジャンヌ・オルタ「ズケズケと人の心の中にまで入ってくるわ！ほつといてほしいのに構ってくるわ！」

カーマ「愛の神として愛してやってるのに、逆に愛されるなんて……」

アルターエゴにオルタ側など性格が反対のサーヴァントたちの告白も吐き出され、理解出来ていなかったW信長も後程理解し、あごに手を当てながら言った。

魔王信長「なるほど、そういうことか。しかし、まさかこれほどいるとはな。その中にお主も……」

沖田総司「何ですかあつてはダメですか？ 私だってこれでも女の子なんですよ！」

織田信長（アーチャー）「いやいや、別にあつてもいいじやろう。ワシはやったことはないが、アイツを思うつてことはそれほど好きである証拠ってことだ」

魔王信長「ワシも欲求がないと言ったら嘘にはなるが、アイツがどのような人間か見極めなければ身を委ねることなど考えはしない」

沖田・オルタ「と言つてはいるが、マスターに会えた日にはとても嬉しそうな表情を浮かべていたぞ？ それから楽しそうにマスターと話をして、一回だけマスターを膝枕した時は……」

——キンッ！

魔王信長「よく喋る口よのお、沖田の映し身よ。それ以上黙らなければ刀の錆とするぞ」

沖田・オルタ「言う前から斬りかかっているではないか！」

織田信長(バーサーカー)「ぬわっはっはっは！ さすがのアヴェンジャーのワシも藤丸には敵わぬようだな」

マシユ「というよりここでの戦闘は止めてください！」

死合になりかけていた中で、様々な意見を聞いたナイチンサンタは顔色を変えずに続けて言った。

ナイチンサンタ「ご安心を！ それぞれの意見があるだろうと思いい、その解決策は用意してあります」

ニトクリス(キャスター)「解決……策？」

再び発したナイチンサンタの言葉にみんなの視線はステージへと向き、ナイチンサンタは置かれていた箱を持ち上げるようにして取り外した。

するとそこには——

マシユ「せ、先輩!!」

『マスター(藤丸殿)(子豚)!!』

服を脱がされパンツ一丁姿で白目となっている藤丸立香が椅子に座っていて、それを見た数名は顔を真っ赤、両手で隠しつつチラツと覗き、鼻血を出して倒れたり、思考停止したりなど人それぞれに反応した。

ジャンヌ・オルタ「ちよっ、アンタ！ ソイツに何したのよ!!」

ナイチンサンタ「薬で少し意識を飛ばしているだけですので問題ありません」

マシユ「大丈夫じゃないですか！」

ナイチンサンタ「では、最後の準備へと取り掛かります」

そう言つて謎の液体の入った瓶を取り出して蓋を開け、そのまま彼

の口へと注ぎ入れ込んだ。

イシユタル（ライダー）「ちよつと!？」

アルトリア（ランサー）「マスター!？」

謎の液体を飲まされた藤丸に会場にいるサーヴァントたちは駆け寄ったが、彼が立ち上がったことで勢いが途中で止まった。

マシユ「せ、先輩！ 大丈夫で……?!？」

マシユが心配していた直後、立ち上がった彼を見てみんなの顔は一気に赤く染まって、何人かは再び両手で顔を隠し、別の何人かは鼻血を出した。

何故なら――

ナイチンサンタ「おや？ まさかここまでの効力があるとは……」

ジャンヌ・オルタ「なななな、なんてものおつたてるのよ!？」

藤丸のある部分を見てジャンヌ・オルタは怒鳴った。

飲まされた液体によって藤丸は獣のように息をつき、ある部分をパ
ンツがはちきれんばかりにまで伸ばしていたのだった。

ジャンヌ（ルーラー）「あわわ……」

メディア「ちよつとナイチンゲール！ 一体何を飲ませたのよ!？」

ナイチンサンタ「パラケルススさんの協力の下で作った超強力精力
剤です。飲まれた藤丸^{マスター}は今、意識が飛んでバーサーカー状態となり、
ここにいるみなさんとお相手します。勿論明日まで効き続けていま
すので何回やっても問題ありません」

シエヘラザード「いえ、何回もやってしまうと死んでしまいそうで
す。私が……」

シバの女王「ツツコむ所、そこですか!？」

《顔揃い（一部）・姉妹組》

ステンノ「あらあら、私たちマスターに襲われるそうよ。エウリュ
ア……」

エウリュアレ「藤丸^彼のアレ、入るかしら……」

ステンノ「え、エウリュアレ!!」

メデューサ（ライダー）「……」

ゴルゴーン「言いたいことは分かるぞ。まさか下姉様があんなことを言うなんて……」

メデューサ（ランサー）「私たちや上姉様が来る前まで藤丸との仲が良かったですから」

アルトリア・オルタ（ライダー）「ふっ、いいだろう。マスターの聖剣、受けてやろうじゃないか」

アルトリア・オルタ（ランサー）「いや、マスターのロンゴミアントは私が頂く」

アルトリア・オルタ（セイバー）「下らん。貴様らや他がどうこう言おうが、最後には私だけを選ぶだろう」

アルトリア（ランサー）「ちよっ、アナタたち!」

アルトリア（ルーラー）「はあ……同じ私でもマスターのことになるとそれぞれ顔が変わりますね。まあ、私もそうですが」

イシュタル（アーチャー）「なんつーモン作っちゃってるのよ、あの婦長と錬金術師は!」

エレシユキガル「藤丸との【ピー】、上手くやれるかな……」

イシュタル（ライダー）「って、やる気マンマンになってるよこの子!」

スペース・イシュタル「まったく騒がしいですね。それにしても……大きい」

スペース・イシュタル（零基3）「あんなの見せられたら……別の衝動が、抑えきれません」

スペース・イシュタル（零基2）「って、アンタたちガン見しすぎよ!」

カラミティ「あははー! やっぱイシュタリンがたくさんだと面白くない」

織田信長（アーチャー）「はーっはっは! 見た目とは裏腹にまさかこれほどの刀身があるとはな」

魔王信長「ふむ、見事なまでの長剣だな」

沖田・オルタ「凄いな、アレ」

沖田総司「いや、私に振られてもどう答えたらいいんですか!？」

メルトリリス「アイツ、興奮するとああなるのか……」

B・B「おやおや？　メルトちゃんも先輩のを見ていやらしい」

カーマ「アナタも言える義理ですか？　見た瞬間で涎出ていましたよ」

B・B「えっ!？」

パッションリップ「あわわ……」

パールヴァティー「同じ顔の私たちをこうして見ると、すごい光景ですね……」

スカサハ「ほう、アイツ等よりか中々のものだな」

スカデイ「いやなに呑気に言ってるのだ!？」

オルトリンデ「……」

スルーズ「なっ、オルトリンデ!？　そのようなことを考えてたのですか!？」

ヒルド「うわー……オルトリンデったらマスターとのそういうの考えてたって、そんな本読んでたの!？」

ジャンヌ（ルーラー）「た、大変なことになりました……」

ジャンヌ・オルタ「たく、なんで面倒なことを起こしたんだか……」

ジャンヌ（アーチャー）「藤丸君の貞操が危ない。お姉ちゃんとして守らないと!？」

ジャンヌ・オルタ「いやなに『お姉ちゃんとして守らないと』だ!　かこつけてヤろうという準備してるじゃないか!？」

ラクシユミー「ハア……ダメだこりゃ」

謎のヒロインX「って、同じ顔だらけでうるさい!　特にセイバー顔の私以外のアルトリア死すべし!」

謎のヒロインXオルタ「それはこちらも同じだと思いますが？　もぐもぐ」

牛若丸（ライダー）「おお……さすが藤丸殿だ」

牛若丸（アサシン）「藤丸殿のあそこが見事に天狗の鼻以上になると

は」

宮本武蔵（バーサーカー）「こうして見ると凄い光景だな……」

宮本武蔵（セイバー）「藤丸君のは興味無くはなかったけど……」

葛飾北斎（セイバー）「ここに来てから早くも貞操奪われるって……」

まあマスターにならないか」

葛飾北斎（フォーリナー）「いやいやいや！ 同じ俺様がそれでいい

のかい!?」

《ハラバラ組（一部）》

シャルロット「はわわ、マスターさんのが凄いことに……!?」

?「驚愕、動悸、上昇」

ケツアル・コアトル「藤丸君のたくましいデウス！」

マリー「あらあら」

マタ・ハリ「藤丸君も男の子だもんね」

刑部姫「（マー君の凄い……ハッ！ マー君と〇男性サーヴァントの組み合わせ、

次のサブフェスはこれにした方が……!）」

マシユ「ダメです……マトモな人が全然いません」

藤丸の姿にあれやこれやと欲望が漏れている光景にマシユは頭を抱えた。

キアラやキルケーといった厄介組がないことには幸いと思つていても、真面目な側の数人もネジが外れたように仲間入りしてしまい事態はもう止めることの出来ない状態へと変貌してしまった。

その時、藤丸がマシユの方へと一気に近づき、その反応に誰もが追いつけなかったためビククリした。

「フー……フー……」

マシユ「せ、先輩……!?」

その一言の後、部屋中に快樂によつて溺れた女性サーヴァントたちによる喘ぎ声が響き渡り、犯行者であるナイチンサンタも快樂に溺れ

ていった。

それから一時間ほどが経った頃、マシユたちがいる部屋の近くまで二人の天才が歩いてきた。

ダ・ヴィンチ（キャスター）「いやー片付けが早く終わって助かったよ。流石私を作ったダ・ヴィンチちゃん自身だね」

ダ・ヴィンチ（ライダー）「そりやあダ・ヴィンチがいなくなった後で私が今まで頑張ってきたんだから」

同一人物でありながらクラスの違う天才二人は楽しく会話をし続け、部屋の入口前を通り過ぎた所でダ・ヴィンチ（ライダー）が立ち止まった。

ダ・ヴィンチ（キャスター）「ん？ どうしたんだい？」

ダ・ヴィンチ（ライダー）「いやなんか、匂いを感じてな。しかも濃度の高そうな、イカの匂いが……」

それを聞いたダ・ヴィンチ（キャスター）が目を光らせてニヤリと笑った。

ダ・ヴィンチ（キャスター）「ほほう、それは興味深い。イカの匂いがして濃度高いってことは……」

ダ・ヴィンチ（ライダー）「誰かがホワイトクリスマスを楽しんでるってわけだよね」

ダ・ヴィンチ（キャスター）「これは是非とも調べてみないとなく。もしや藤丸君とマシユがしているのであれば」

ダ・ヴィンチ（ライダー）「二人の成長を記録しとかないとね」
そう言って二人は匂いを辿って見つけた目的の部屋へと着き、そのまま入った後に二人の喘ぎ声が部屋中に響くようになった。

その数分後――

ペンテシレイア「どこだー！ アキレウスー！」

アキレウスを探してカルデア中を回っていたアマゾネスの女王・ペンテシレイアが鉄球を持ったまま走ってきて、部屋の前を通り過ぎた所で急ブレーキを掛けて走りを止めた。

ペンテシレイア「ん？ 今の匂い……」

感じ取った匂いに気になってクンクンと嗅覚を集中させ、再び感じた匂いを辿りながら通り過ぎていた部屋の前へと着いた。

ペンテシレイア「この匂いは男と女での……まさかアキレウスか！」

某ギリシヤ男性への怒りを燃やし、鉄球を構えた彼女は扉を開けて中へと入った。今度は彼女の喘ぎ声が響いて――。

『ああああああーッ！』

その後、次々に部屋へと入った者がいるとか、いないとか……。

あれからどれくらい経ったのだろう。何かによつて俺は意識を失い、やつとの感じで目を覚まそうと思っていた。

「ううーん……」

いつの間にか布団が掛けられ、少しずつ意識が戻ってきて俺はゆつくりと上半身を起こした。

「ふあーあ……俺、いつの間に寝てたんだ？」

背筋を伸ばして両目をゴシゴシと掻き、次に見た光景で俺の思考は止まった。

「え……」

目の前に見えた光景に俺は唾然した。

何故なら――半裸、そして全裸で寝ている、マシユを始めとした女性サーヴァントの群れが俺の周りで寝ていたからだだった。

「(え、ええええー!!? これどういうこと!!? 何でみんな……つて俺も脱げてるし!? まさか……)」

掛けられてた布団をめくって自分の状態を確認した。

……うん、パンツは履いている。けど、匂いがヤバい。これはつまり……

「(この状況からして、俺、いつの間にかヤっちゃったってわけ!!)」
記憶は思い出そうにも覚えておらず、一度も一線を越えるようなことをしなかった俺にとつてこの状況に青ざめて……って!

「(あそこにいるのは……ペンテシレイアに、デオンに、メカエリちゃん!?! 人間じゃない方と性別不明、怒らせたらヤバい人もやっちゃったの俺!?)」

さらなる事態を見てさらに青ざめた俺は音を立てないようにして部屋の扉らしき所へと歩き、ゆっくりと開いて外を確認し、静かにその場を去るようにした。

その後、部屋に戻って念入りに念をで体全体をしつかりと洗ったが……ヤバい、ペンテシレイアは確実に殺してきそうだが、メルトも……他何人かも俺を狙ってきそうかも。

とにかく、しばらくは種火集会と修練所は休むとしよう。うん、どこかに隠れないと……。

翌朝、大広間にいた女性サーヴァントたちは一旦体を清め、朝食を終えた後に藤丸立香の搜索を始めていた。

『そつちいた?』

『ダメ、こつちにいなかった』

『魔力反応はどう?』

『遮断されててダメみたい』

『おーい! こつちで目撃したという情報あつたぞー!』

目撃情報も得て、夜を過ぎた者たちは移動していき、その光景に事情を知らない者たちはただ啞然と見ていた。

シグルド「随分騒がしいようだな」

ブリュンヒルデ「一体何をして……」

「あ、お姉様！」

状況を確認していた所、遠くからワルキューレ三姉妹が走ってきて、それに気づいたシグルドとブリュンヒルデも振り返るようにして話し掛けた。

ブリュンヒルデ「スルーズ、一体何が起きてるのですか？ 随分と走り回る人がたくさんいるのだけど……」

スルーズ「え、えっと……その……」

シグルド「ヒルドも、オルトリンデも妙に大人しいな。動きもぎこちなくなっていたぞ」

ヒルド「それはその……」

オルトリンデ「そ、それよりも……マスターを知りませ……」

『どこだマスター！ 私を襲って傷を付けた代償受けてもらおうぞ！』

『どこですかマスター！ 他の女性たちと寝たの分かってるんですよ！ 私とも寝てもらいますからねー！』

どこぞの女王様と蛇姫の声が響き、その直後で三姉妹の顔は真っ赤になった。

シグルド「今の発言は……」

オルトリンデ「……」

ブリュンヒルデ「え？ あなたたち、もしかして……」

ヒルド「も、申し訳ありません！ ブリュンヒルデお姉様！」

スルーズ「私たちマスターに抱かれました！」

ブリュンヒルデ「え、ええっ!!」

ヒルド「私たちだけでなく、マシユと、マスターに好意を抱いていた者たちもいまして合計95名ほど一緒に夜を共にしました！」

オルトリンデ「ぶしゅー……」

シグルド「なん……だど……!!」

突然のカミングアウトにシグルドは思考停止し、ブリュンヒルデは頬を赤らめて蒸気を発生した。

スルーズ「只今、清姫などの未経験の人たちと、私たちのような経験した人たちがマスターを探し回っていました……」

ヒルド「未経験者はとても見るのに絶えない笑顔で獲物を狩る狩人

のようにマスターを探し……」

オルトリンデ「ペンテシレイアを筆頭とした一部の経験者はマスターを殺そうとしている目で探しています……」

ブリュンヒルデ「何故そのようなことに……」

オルトリンデ「主な原因はナイチンゲール。彼女がパラケルススと共同で作った超強力精力剤をマスターに飲ませたからそうなった」

シグルド「あの婦長と錬金術師が？」

ヒルド「私たちやマシュたちのことを思ってたことでしたが……」

スルーズ「その精力剤があまりにも強力過ぎて……」

オルトリンデ「意識が飛ぶほどに激しく……されました」

ブリュンヒルデ「そ、そこまで!?!」

ヒルド「その後、目が覚めた時にはマスターは消えていて」

スルーズ「現在に至るようになりました」

オルトリンデ「だからマスターを守るべく私たちも探し回っているのです」

「「婚姻届けを書いてもらうためにッ!」」

シグルド「ブーツ!」

ブリュンヒルデ「ええーッ!?!」

いろいろと夜の内で変わってしまった三姉妹にシグルドは頭を抱え込み、ブリュンヒルデは戸惑うしかなかった。

その後、二日後にて姿を隠していた藤丸立香が発見され、その先どうなったのかは皆様の想像とさせて頂きたいと思えます。

輝けるみんなのマス

コットアイドル——ドウムジより